

日本労働年鑑 第54集 1984年版  
The Labour Year Book of Japan 1984

第二部 労働運動

VII 公害反対闘争

6 水質汚染公害闘争

きれいな水といのちを守る合成洗剤追放第九回全国集会

「森と土と水を守ろう」をメインスローガンにした「きれいな水といのちを守る合成洗剤追放第九回全国集会」は、一九八二年一〇月一六、一七の両日、熊本市水前寺体育館で、三三〇〇人が参加して開催された。主催者は、総評・全水道・自治労・日教組などの労働組合や各地の合成洗剤追放の住民運動グループ、消費者一体などで構成されている「きれいな水と命を守る合成洗剤追放全国連絡会」である。

この第九回全国集会は、つぎのような、これにまでない特徴をもっていたことが指摘されている。

(1)メインスローガンである「森と土と水を守ろう」にみられるように、合成洗剤追放運動をたんに合成洗剤を追放して水を守るという運動としてだけでなく、すべての生態系・環境を守るという運動として発展させることが確認された。

(2)ますます強まる戦争の危険にたいして、反核・反戦のたたかいを強化していくことが確認された。

(3)集会の挨拶に立った富塚総評事務局長が「総評も全組織をあげて平和運動とともに // 緑と安全な食糧と水を守るたたかい // を、国民運動の重要テーマとして取り組む」と決意を述べたように、きれいな水を守るという課題が国民春闘の課題として提起され、「有リン合成洗剤」のみの規制にとどまる行政の壁をつきやふる運動へ発展していくことが確認された。

第一日目は、五〇〇人の参加者によるパレードがおこなわれ、チラシ、石けんの試供品、プラカードなどで道行く人に合成洗剤の危険性を訴えたあと、三三〇〇人の大集会がおこなわれた。

第二日目は、「上手な洗濯の仕方」「水質汚染と合成洗剤」「追放運動をどうすすめるか」など六分科会に分かれ、無リン合成洗剤攻勢にたいしてどう運動を再構築していくかなどについて討論がおこなわれた。

多摩川の清流をとりもどすたたかい

全水道(全日本水道労働組合)は、河川の清流をとりもどすたたかいとして、ブルーウォーター作戦を展開しているが、その一環として、多摩川の清流をとりもどすための運動をすすめてきた。

多摩川シンポジウム「多摩川の自然と清流を取りもどすための集い」は、一九八二年九月一五日、多摩川沿いの玉川小学校体育館で開催された。これに参加したのは、全水道、多摩川の自然を守る会、多摩川にアユをよびもどす会など五八団体、約二五〇人。多摩川の自然破壊の実態がつつぎと報告され、瀕死の状態にある多摩川を生き返らせる方策について討論が加えられた。そし

て、行政にたいする「多摩川の自然と清流をとりもどすため」の要望書と集会宣言が採択された。

## 瀬戸内の環境を守る第八回瀬戸内沿岸住民集会

第八回瀬戸内沿岸住民集会(同実行委員会主催)は、一九八二年八月七、八の両日、愛媛県喜多郡長浜町体育会館で、学者、弁護士、瀬戸内を守る活動をしている住民団体など一九〇人が参加して開催された。

「瀬戸内の環境を守れ」との世論の高まりは、一九七八年に瀬戸内海環境保全特別措置法を制定させたものの、その後も無計画・無秩序な開発、埋め立てはとどまるところを知らず進行してきた。集会では、このような動きに反対し、瀬戸内に残された自然を守るとともに、環境保全と産業開発の接点を考えようと、瀬戸内の新しい「町づくり」をテーマにした。参加者による現地視察は「伊方原発」だった。

記念講演は宮本憲一大阪市立大教授により「新しい町づくりを考える——エネルギー基地の検討——」と題しておこなわれた。討論のなかでも、たんに水質汚染に反対するというだけでなく、開発についての住民の側からの政策を提起していくべきだという意見が数多く出された。最後に「長浜宣言」を採択して閉会した。

日本労働年鑑 第54集 1984年版

発行 1983年11月30日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 ●

2001年8月28日公開開始

---

■ ←前のページ 日本労働年鑑 1984年版(第54集)【目次】 次のページ → ■  
日本労働年鑑【総合案内】

---

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)

---